

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K01	氏 名	金子 敏治
研究主題 —副主題—	中学生が主体的に取り組む効果的な職場体験学習の在り方 —米国サービス・ラーニングの視点を手掛かりとして—		
所属校	杉並区立杉森中学校	派遣先	創価大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	平成 25 年 10 月、国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書」でキャリア教育の更なる充実が指摘され、中学校においては職場体験学習がその重要な役割を果たすものとして日本全国で実施されている。職場体験は、平成 16 年に文部科学省がキャリア教育推進の一方策としてその充実を示し、翌年、5 日間以上の職場体験を行う「キャリア・スタート・ウィーク」が開始された。その結果、職場体験の実施校が年々増加し、平成 24 年度は 9, 781 校中 9, 582 校 (98.0 %) と過去最高の実施率となった。このように職場体験が各学校で取り組まれ、多くの生徒が楽しく有意義な体験だったと考える一方、一部では生徒の取り組む意欲に欠け、途中で体験が中止になった事例もある。また、職場体験が単なる体験で終わっている場合がある。本格実施されて間もなく 10 年が経過しようとしている今こそ、拡大と定着の段階から体験学習者（生徒）と体験受入先の両者に資する職場体験学習の在り方について再考する時期であると考えた。「職場体験学習とはどのような視点到に依拠し、どのような内容や方法をもつべきなのだろうか。」「学校現場はそれをどのように具現化すればよいのか。」といった問題意識に本研究は基づいている。 そこで、本研究では、学校、生徒及び体験先の三者がどのように職場体験学習を捉えているかを明らかにした上で、社会体験と学校教育をつなぐという観点から職場体験学習に近似した米国のサービス・ラーニングの視点を端緒として、今後の職場体験学習の効果的な在り方について提案する。
II 研究の方法	まず、中学校教員、生徒及び体験先事業者の三者がどのように職場体験学習を捉えているのかについて分析し、職場体験学習の期待される成果と課題を明らかにした。さらに、職場体験学習の重要な課題の一つである体験先の確保の仕方について、体験先を生徒が自ら電話等で探す場合（中学生が探した群）と学校が事前に確保した中から生徒が選択する場合（学校が事前確保した群）とでどのような生徒の意識の違いがあるのか、また、それぞれの効果と課題について量的、質的両方の観点から分析した。具体的には、都内公立 A 中学校の生徒 232 名を対象に職場体験学習の意識の違いについて考察するために、21 項目の質問紙調査を行い、項目ごとに平均値を算出し、t 検定にかけ量的分析を行った。また、三者の質問調査やアンケート等の記述部分の質的分析を行い、その効果と課題を明らかにした。これらの結果を踏まえ、サービス・ラーニングの視点から見た質の高い体験学習の要素について考察し、最後に中学校における効果的な職場体験学習の在り方を提案した。

Ⅲ 研究の結果

(1) 三者が捉える職場体験学習で期待される効果と課題

	教員の意識	体験学習者の意識	体験先事業者の意識
効果	・体験学習の有効性、社会参加の経験 ・自己有用感や自己の適性 ・生きるための力 ・働くことの意義 ・大人との関わり ・社会人としてのマナー、責任感 ・役割分担 ・困難さの克服 ・他者への思いやり ・体験の共有化 ・まとめる力、発表力	・キャリア形成、進路選択、適性 ・働く姿勢、意味、必要な力 ・仕事内容 ・気持ちの変化 ・家庭理解 ・社会とのかかわり、ルールやマナー ・新たな視点	・中学生に対する新たな認識 ・教育への貢献 ・社会貢献 ・従業員への影響 ・学校や地域との繋がりの強化 ・満足感 ・イメージアップ
課題	・体験先の確保、体験先との連携 ・体験内容の質と量 ・受け入れる負担 ・事前学習、事後学習の内容と時間 ・体験先選択方法や基準 ・体験時間、学習の科数、授業時数 ・取り組めない理由、事後の学びの差 ・体験先からの評価、評価方法や観点 ・評価の共通理解 ・学校、行政、地域、他学年との連携 ・体験先、客からのクレーム	・職種の選択 ・体験内容 ・自己の体験に取り組む意識	・生徒の意識 ・グループ構成 ・体験内容の制限 ・コミュニケーション ・学校との連携 ・事前学習の充実 ・体験日数 ・受け入れできない理由 ・学校からの依頼時期 ・受け入れる生徒の希望

(2) 体験先の確保方法についての分析結果

量的分析の結果、21 項目中 3 項目に有意差が見られた。中学生が自ら体験先を探したほうが体験先で働くことへの不安が少なく、職場体験学習がその後の進路決定のための情報収集に役立つと考えている。しかし、学校が事前に確保したほうが希望の職種を体験できたと考えている生徒が多いことが分かった。次に、自ら体験先を確保する意欲に関わる変数同士の相関分析の結果、自ら体験先を確保する意欲が高い生徒ほど職場体験を最後まで責任をもって取り組んだり、今まで以上に新しいことに挑戦しようと考えたりする傾向が高いことが分かった。次に、自由記述分析の結果、中学生が自ら体験先を探したい理由として、自らの希望や適性を考えながら主体的に職場体験学習に取り組み、そのことが将来に良い影響を与えると考え、探したくない理由として、自ら探すことへの困難や不安が大きいと考えていることが明らかになった。

(3) サービス・ラーニングの視点から見た質の高い体験学習の要素

サービス・ラーニングでは質の高い体験の要素として、①意味のあるサービス活動、②カリキュラムとの連携、③振り返り、④多様性、⑤若者の声の反映、⑥参加者間の互惠性、⑦活動経過の観察、⑧持続と集中の八つを挙げている。これらの中でも特に、体験活動に学習としての構造をもたせ、事前、事後を含めた各活動に振り返りを行うことを必修条件としている。さらに、学校側の視点からだけではなく体験先側の視点に立ち、参加者間に互惠性が保たれることが重要であるとしている。

Ⅳ 考察

以上の研究結果から、中学校における効果的な職場体験学習の在り方について四つの提案をする。①生徒が自ら体験先を探し、決定する機会を与えること（デシは他者が人を動機付けさせる方法として自律性を支援することを挙げている）、②体験先や家庭との連携の充実を図り、体験のねらいと評価内容・方法の理解を図ること、③事前、体験、事後の各学習で振り返りを行い、次の課題意識をもたせ、学習の構造化を図ること、④事後学習で職場体験先の課題を中学生の視点から考え、解決のためのアイデアを提案、具現化することである。また、体験先が教育に貢献したことへの証として「(仮称) 感謝証」を生徒がデザイン、作成し、体験先に贈呈することを通して、社会参加や社会貢献の意識を育成していくことが考えられる。